辰の年、龍の話題

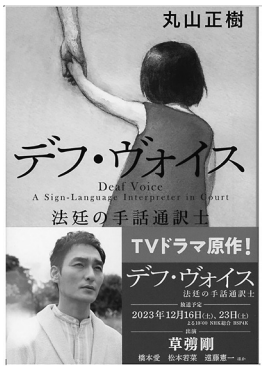
デフ・ヴォイス

夜、日比谷公園にくっきりと円形の時計盤が白く輝く。アナログの魅力を誇るように。市政会館の時計台である。その隣には日比谷図書文化館がある。千代田区立日比谷図書文化館である。わが法人の新橋から歩いて10分であり、夜10時まで開館している。雑誌コーナーには多くの閲覧者いる。2月17日に「茨木のり子の世界」というイベントを開催するので、カレント情報を得るために当館を訪ねた。

住所地や勤務先が千代田区ではなく港区の者は最大5冊までの貸し出し数で、すぐに限界になった。借りていた丸山正樹の著作と引き換えに借りた。

なかでも『デフ・ヴォイス』（法廷の手話通訳士）は、これを原作として草彅剛が主演のNHKテレビでドラマ化され、前編・後編の2回シリーズとし放送されたので話題となった。それは、聾者をテーマとして、しかも被告となった聾者の裁判での弁護人の手話通訳者の物語である。

裁判での聾者の立場に寄り添った手話通訳の重要性、すなわち弱者に対するシンパシーからエンパシーとして通訳すること、また手話は言語であるという認識をTVドラマとして知らしめた。原作は前述した丸山正樹の原作であった。話題となったのは草彅剛の好演にもよるものであり称賛である。



1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。

地元力発見！ ㊷

佐藤建吉　「洸楓座」代表

辰年は龍が話題

今年は辰年、なにかと、龍が引き合いに出される。このコラムもその例にもれず「龍」を取り上げる。龍には竜という漢字も用いられるが、龍の方が視覚的にも好きである。昔は盛んだった正月の凧揚げには「龍」の文字が用いられていた。千葉県の龍ケ崎市の正式名称は、「龍」が用いられているが、常用漢字での表記をする場合は「竜」に置き換えてもいいという。先述した凧揚げのイメージに合致しているか、昇龍や飛龍は龍が相応しい。

話題は戻り辰年の龍、すなわち仮想の動物（怪獣）の龍についてである。筆者も委員の一般社団法人・国際善隣協会の講演委員会での例にもれず「龍」を取り上げる。は、本年1月に『龍の世界』の著者である池上正治氏による書名と同名の講演会を開催した。その案内には、「12年に1回の辰（龍）年がやってきた。龍を感じ、龍を形づくり、龍を語り、龍を生活のリズムに組入れてきたのは、中国人である。」と述べられている。池上氏は、作家・翻訳家であり、中国の自治区（省や民族自治区）のすべてを訪問したという中国通である。龍の話題に惹かれて足を運んだ自治区もあるという。さすがに龍の魔力は大きい。

龍と聾

丸山正樹の著作には、『デフ・ヴォイス』の続編として『龍の耳を君に』がある。同書には「龍の耳は音を聞くことができるので、耳は不要になり、海に落としたという」記述がある。しかし、これは俗説であるとされている。こうした俗説は、「この耳は実際には役立たず、その上にある鹿の角みたいなものがアンテナの役目をして物音を聞く、故に耳の聞こえね龍の耳としてすなわち聾と読む。…」などもあるという。これに由来し、「龍」の字の下に「耳」という字を書いた「聾」（ろう）の文字は偏見を持ってみられることもがある。

例えば、聾学校という表記は、聴覚障害者という解釈から「ろう学校」へ改称されてきた。しかし、「聾」は「龍」と「耳」からなる形声文字であり、龍の角や耳とは関係がないのである。そこで山梨大学大学院の山田康朝氏は、「聾」は差別的な意味合いではないことを論文で解説し、静岡県の行政課長が、「聾」という字には差別的な意味なニュアンスがあるというとして「聴覚障害」と言い換えが進んでいるという見解に、そうした偏見を持たないようにとの指摘を行っている。

こうして龍は、思わぬ偏見を与えられてもいる。しかし今年は上野寛永寺が創建400年に当たる。これを記念して6㍍×12㍍の龍の天井絵が描かれた。絵師は東京芸大名誉教授の手塚雄二氏である。その展示会が日本橋三越本店で2月14日～3月5日で開催されている。